

幼 兒 の 教 育

昭 和 九 年 六 月

こ
げ

わたし達の目にさげはないか。わたし達の言葉にさげはないか。わたし達の氣分にさげはないか。

もごより自分で心づかぬ時のことである。まさかに、心づいてそんなことありやうはないが、ちらちら光る目、ふき出る言葉、思はず動く氣分に、自分でも心づかない峻烈はないか。

もごより瞬間のこごである。直ぐ氣がついて急いで取り直さずにはならないが、しかし、さげはいつでも、ちよつと刺すものである。その一と突きが、もう相手の皮膚を破つてゐるものである。

幼児の心の膚は、その軟い皮膚よりも軟い。わたし達にほんの小さな一つのさげがあつても、直ぐいため傷けずに置くまい——或る朝、幼稚園の垣に薔薇を植えてゐる植木屋と立話をしながら、その薔薇のさげよりも、自分のさげが氣にかゝりだしたわたしでもある。